

妙の湯

起業家精神に溢れた新参旅館

十和田八幡平の温泉宿のいくつかは、17 世紀初頭にまでさかのぼる歴史を持ちます。妙の湯は比較的歴史が浅く、現社長・佐藤貢一郎さんの曾祖父である後藤サダジさんによって 1952 年に創業されました。「曾祖父は荷運び人として、黒湯温泉という近くにある別の温泉のお客さんの荷物を運んで行ったり来たりしていました。昭和（1926-1989）の時代はハイキングがとても盛だったので、サダジは温泉を見つけたとき、自分で温泉業を手掛けようと決めたのです」と貢一郎さんは言います。

当初は楽ではありませんでした。1960 年代後半まで、きちんとした道路もバス路線も電気も通っていませんでした。何よりも困ったのは、もともとあった簡素な建物が、冬の雪の重みで一度ならず二度までも潰れてしまったことです。貢一郎さんも、子供の頃、木製の窓枠の隙間から雪が室内に入り込み、湿ったタオルが一晩で凍ってしまったことを覚えています。

1980 年代に新幹線が近くの盛岡まで延伸されると、事業は軌道に乗り始めました。今でこそ東京から盛岡までは新幹線で 2 時間ちょっとですが、昔は東京からこのあたりまでは一番早い列車で 8 時間、寝台列車では 12 時間かかっていました。お客さんが増えるにつれて、妙の湯はもともと提供していたハイカーや湯治客のための自炊プランに加え、食事付きのプランも提供するようになりました。それでも、1980 年代後半になると、貢一郎さんの曾祖父（その頃はだいぶ高齢になっていました）は宿

の経営をかなり負担に感じるようになっており、この宿を売却しようかと考えていました。

当時、東京に住んでいた貢一郎さんの両親は、サダジさんの苦勞が水の泡になるのは忍びないと考えました。妙の湯がある乳頭温泉郷は、まだ現在のようなブランド力はありませんでしたが、彼らには美しい国立公園の中にある温泉が大きな可能性を秘めていることがわかっていました。

貢一郎さんの父親は仕事を早期退職し、東京の家を売り、借金ではなく現金で現在の建物を建てました。「曾祖父は 1992 年に亡くなりましたが、家族が後を継いだことを喜んでいました。曾祖父の葬儀の席で、私は東京を離れ、この土地に移り住むという少々軽率な約束をしました。当時、私は 27 歳でした」と貢一郎さんは言います。彼はその約束を守り、妙の湯は今日まで繁盛し続けています。